金屬性カテーテル　一
海綿鉗子　五
把針器　二

一五、腹式卵巣腫瘍剔出術

圓刄刀　二
止血鉗子　二五
長止血鉗子　五
鑷子（有鈎、無鈎）　各二
剪刀（曲、直）　各一
單純開腹鈎　二
二辨開腹鈎　一
子宮鉗子　一
ミュゾー鉗子　二
球鉗子　二
ズンステル氏套管針　一
ネラトン氏囊腫鉗子　二
側板開腹用（長、廣、短）　各一
把針器　二
鈍針　二
圓堅鋭針（大、小）　各一
縫合針　二
鐵線切剪刀　一
メートル尺　一
海綿鉗子　五
滑息子　二
鐵線切剪刀　一
メートル尺　一

一六、子宮外妊娠手術及び喇叭管手術、癒着剝離

圓刄刀　二
止血鉗子　二五
長止血鉗子　五
鑷子（有鈎、無鈎）　各二
剪刀（曲、直）　各一
單純開腹鈎　二
二辨開腹鈎　一
子宮鉗子　一
ミュゾー鉗子　一
球鉗子　二
滑息子　一
梅綿鉗子　五
開腹用側板（長、短、廣）　各一
把針器　二
鈍針　二
縫合針　五
鐵線切剪刀　一
メートル尺　一
烙白金　一

一七、腹式子宮癌（及び惡性腫瘍）全剔術

圓刄刀　二
止血鉗子　二五
長直止血鉗子　一〇
長曲止血鉗子　一〇
長曲細止血鉗子　三
鑷子（有鈎、無鈎）　各二
直剪刀　一
曲剪刀（極長、長、短）　各一
單純開腹鈎　二
二辨開腹鈎　一
癌腫用子宮鉗子又ハ四鈎鉗子　一
ミュゾー氏鉗子　二
球鉗子　二
直腸鈎　一
輪尿管鈎　一
開腹用廣側板（長、短）　各一
ウェルトハイム氏有角鉗子　二
滑息子　一
把針器　二
鈍針（大、小）　各二
圓堅鋭針（長、短）　各一
縫合針　五
海綿鉗子　七
鐵線切斷用剪刀　一
金屬性カテーテル　一
メートル尺　一

其他の手術は之に準ず。

第二、産科手術（さんくわしゅじゅつ）

（1）軟部産道擴大術（なんぶさんだうくわくだいじゅつ）

(1) 子宮頸管内制腐瓦設栓塞法

ジモン氏子宮鏡	一組	海綿鉗子 三
翼狀子宮鏡	一	長鑷子 一
ミュゾー氏鉗子	二	敷布用止血鉗子 五
瓦設挿入子	一	剪刀 一

(2) 膨脹子（ラミナリヤ桿、ペロ桿、壓搾海綿）を以てする頸管擴張法

ジモン氏子宮鏡	一組	海綿鉗子 三
翼狀子宮鏡	一	敷布用ベアン鉗子 五
ミュゾー氏鉗子	二	長鉗子 一
膨脹子		剪刀 一
麥粒鉗子	一	

(3) メトロイリンテル挿入法

敷布固定用アン鉗子	五	メトロイリンテル送入器 一
ジモン氏子宮鏡	一組	イルリガートル 一
翼狀子宮鏡	一	重錘 一
ミュゾー氏鉗子	二	滑鈎 一
メトロイリンテル	二	

(4) 金屬製擴張子（ヘガール氏、ボッシー氏）を以てする頸管擴張法

擴張子（ボッシー氏或はヘガール氏）	一	ミュゾー氏子宮 一
ジモン氏子宮鏡	一組	海綿鉗子 三
翼狀子宮鏡	一	敷布止用ベアン鉗子 五

(5) 腟式帝王切開術

ジモン氏子宮鏡大	一組	鑷子（有鈎、無鈎） 各二
翼狀子宮鏡	一	把針器 二
側板（内一は長大なるを要す）	三	縫合針 四
圓刃刀	一	メトロイリンテル 一
尖刃刀	一	メトロイリンテル挿入子 一
直及曲剪刀	各一	（人工蘇生術用器）
ミュゾー氏鉗子	二	制腐瓦設 一
球鉗子或ハセゴン氏鉗子	五	消息子
止血鉗子	二〇	

（ロ）骨盤擴大術

尖刃刀	一	止血鉗子 一二
圓刃刀	一	鑷子（有鈎、無鈎） 各二
剪刀	一	縫合針 五
耻骨切斷術用有柄針	一	把針器 一
ギグリー氏線鋸及把柄	一組	金屬性カテーテル 一
消息子	一	ネラトン氏カテーテル

（ハ）廻轉術（外回轉術には何等の準備を要せざるを以て双合、内回轉術に付きて述べんとす）

麻酔用器	一式	蘇生法に關する器具 一式
殺菌回轉紐	二	破水用ピンセット 一

第六章　手術の準備及び介助

（二）骨盤端位挽出術

同轉紐	二	
ブンゲ氏同轉紐送入子	一	（ネーゲル氏鉗子 一）
スメリー氏鈍鈎	一	人工蘇生用器具 一式
（キュストーネル氏腎鈎	一）	（會陰縫合用器 一式）
		子宮カテーテル 一

（ホ）鉗子手術

ネーゲル氏鉗子	一	縫合針 三
剪刀	一	止血鉗子 五
把針器	一	有鈎鑷子 二
麻醉用器	一式	人工蘇生用器具 一式
子宮カテーテル	一	（會陰縫合用器 一式）

（ヘ）胎兒縮少手術

(1) 穿顱術

ネーゲル氏穿顱器	一	麻醉用具 一式
ブラウン氏碎頭器	一	ミュゾー氏鉗子 二
ボーズマン氏子宮カテーテル	一	鑷子（長） 一
イルリガートル	一	子宮鏡 一組
骨鉗子	一	翼狀子宮鏡 一
剪刀長	一	

ブラウン氏斷頭鈎	一	（ネーゲル氏鉗子 一）
シーボルト氏剪刀	一	（スメリー氏鈍鈎 一）
ネーゲレー氏穿顱器	一	ボーズマン氏子宮カテーテル 一
骨鉗子	一	子宮鏡 一組
回轉紐	一	翼狀子宮鏡 一
ミュゾー氏鉗子	二	鑷子（長） 一
麻醉用器具	一式	

(2) 截胎術（斷頭術）

圓刃刀	二	縫合針 五
止血鉗子	二五	海綿鉗子 五
長止血鉗子	一〇	金屬カテーテル 一
有鈎、無鈎鑷子	各二	鐵線切斷用剪刀 一
直、彎剪刀	各一	メートル尺 一
單純開腹鈎	二	ネーゲレー氏鉗子（腹膜外切開なれば） 一
開腹用廣短側板	二	麻醉用器 一式
ミュゾー氏鉗子	三	人工蘇生用器 一式
單鈎鉗子	三	罵（鋭）鈎 二
把針器	二	子宮消息子 一

（ト）帝王切開術

（其他の手術は之に準ず）

一旦使用せる器械は曹達水と刷毛にて洗滌し煮沸消毒を施こし、「アルコール」を濕したる布片にて充分清拭乾燥せる後更に油類又はパラフイン等を塗布して保管すべし。

第三項　患者の準備

手術を受くべき患者の準備は最も必要にして、手術の種類によりて多少異るも大略次の如し、

(一)前日全身浴をとらしむ

(二)頭髮を洗淨し小さく結束す

(三)手術前日　就褥　前ヒマシ油一五瓦を與ふ

入院後檢便し蛔蟲卵を有するものには豫め「サントニン」を與ふ

(四)手術當日朝少量の流動食を與へ中食を廢す

(五)體重を測定し置くべし

(六)手術當日午前中豫め手術野を剃去す

(七)其後更に沐浴せしむ、此時口腔、齒牙を清潔にすべし

(八)腹式手術患者には豫め腹部に一%フォルマリン水、一%昇汞水の微温濕布を貼す

(九)手術一時間前「パントポン、スコポラミン」の半筒(パントポン　〇・〇一　スコポラミン　〇・〇〇一五)を注射し、更に卅分前に又半箇を注射す

(一〇)清潔なる衣服を着せしめて手術室に送る

以上は午後手術を行ふ場合の準備を示したる者なり、午前に手術を行はんと欲せば各準備時間を繰り上げざる可からず。

手術の種類(第三度會陰破裂、直腸腟瘻、痔核等)によりては豫め灌腸をなし、且つ直腸洗滌を施こすべし又豫め阿片丁幾を投ずべし。

手術局部の消毒

手術局部は絶對的に清潔となさゞるべからず、消毒法に種々あるも吾人は通常フュールブリングル氏法及沃度丁幾消毒法を賞用す(消毒篇參照)。

手術時には手術野のみを露出し他部を敷布にて被包せざるべからず、其方法に一定の方式なしと雖も著者は左の方法に從ふ。

(一)腹式手術患者にありては下肢を消毒したる脚袋にて包み、約四尺平方の滅菌敷布四枚を以て切開部を殘して、下腹部を四方面より被包し、尙他の一枚を以て足部を越えて兩下肢を被包す。敷布を固定するにはペアン止血鉗子に用ふ。

近時著者は手術野に相當せる部に窓を作りたる一枚の大敷布にて患者を被包す。

(二)腟式手術なれば患者を截石位となし脚を手術臺に固定せる後、消毒せる脚袋を著せ、腹壁を一枚の敷布にて被ひ、穴明敷布を以て兩脚、臀部、肛門の周邊を被ひ外陰部の

みを露出す。

單純なる手術は此儘にて充分なるも、會陰整形術、腟式開腹術等の如く複雜にして多くの器械を要する場合には、尙一枚の長敷布を用ひて、其一緣を穴明敷布の圓窓の下緣を堺として之に固定し、他端を手術者の胸邊の高さに於て手術衣に固定し其内に器械を容る。

手術時に於ける患者の體位

腹部の手術は患者を仰臥水平位となして之を行ふも、骨盤諸臟器の手術時には、腹膜を開くと共に骨盤高位となし、手術中同位置を保持せしめ、手術を終り腹膜縫合前再び水平位に復す。腹式帝王切開術を除きたる凡ての産科手術及び腟式手術は截石位となして之を行ふ、即ち仰臥せる患者の兩脚を出來得る限り開大し膝、股關節を強く屈曲し臀部を手術臺端より前方に突出せしむ。

下肢保持器を有せざる分娩臺にて産科手術等を腟式に行はんと欲せば、兩脚を介助者に支持せしむるか、或は分娩臺の前に置かれたるに椅子の上に兩脚を安置せしむべし。

第四項　手術介助者の準備

手術に當り手術室内に入る看護婦殊に直接介助の任に當る者は術者及び助手と同樣に消毒

を嚴行せざるべからず、即ち毎回洗濯したる看護服を着用し、防水布の前掛をなし、肘關節の上部まで衣類の袖を捲き上げてフールブリングル氏法によりて肘關節の上まで消毒すべし。然る後消毒したる「メリヤス」手袋を穿ち、帽子を蒙むり、手術用假面を以て鼻孔、口を被ひ、消毒手術衣を著用すべし。

消毒終りたる後は一切不潔物に觸れざるべし、誤りを不潔物に觸れたる時には手指を不潔になさゞる樣手袋又は手術用外套を脱し新しく消毒したるものと取り代ふべし。

手術患者は傳染し易きものなれば、少くとも一兩日前に死體の處置をなしたるもの、又は高熱患者を取扱ひたるもの、膿汁等の不潔物に觸れたるものは手術に干與すべからず。

第五項　器械、繃帶材料及手術用諸物品の殺菌法

器械、繃帶材料並に縫合糸の殺菌法につきては消毒學に論じたるを以て玆に略す。

機械臺、消毒用刷毛貯槽器、石鹸精貯槽器、手洗鉢及イルリガートル等の如く形の大なるものは煮沸又は蒸氣消毒を行ふこと困難なれば通常石鹸を以て十分洗拭したる後、酒精を用ゐて能く拭ひ、更に三%石炭酸にて清拭す。イルリガートル又は手洗鉢等の如く金屬性ならざるものは石炭酸の代りに昇汞水を用ふるも可なり。

第三節　麻醉介助

麻醉法は元來醫師の行ふ可きものなり、されども急を要する産科手術の際、又は各種の事情により麻醉を行ふべき醫師を欠く場合少からず、而も局所麻醉、腰髓麻醉にありては術者豫め自ら之れを行ひうるの便あるも、吸入麻醉にありては否らず、手術と同時に之を行はざるべからず、殊に産科手術には通常吸入麻醉を用ひ他の方法を行ふこと殆んどなし。從ひて諸姉は醫師の監督の下に吸入麻醉法を行はざるべからざること往々あり。

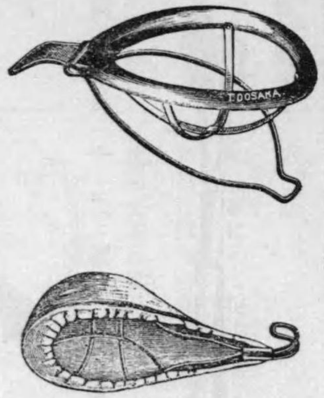
第一項　吸入麻醉法

吸入麻醉法中最も廣く行はるゝは「クロ、ホルム」及び「エーテル」麻醉にして、産科手術には專ら「クロロホルム」麻醉を用ふ、婦人科手術に吸入麻醉を應用する時には通常兩者を併用す(初め「クロ、ホルム」を用ゐて深麻醉の狀態となし、同狀態を持續せしむる爲に「エーテル」を使用す)。

(一)麻醉準備　前章第三項に記せる如く麻醉を施さんとする患者には前夜下劑を與へ且つ手術當日成る可く飲食物を與へざるべし、これ麻醉患者は容易に嘔吐を起し、且つ吐物を呼吸道内に侵入せしむるの危險あればなり。

次に口腔、齒牙を清掃し、義齒を豫め除去せしめ、呼吸並に其監視を障碍するが如き衣類の緊縛を除くべし。

(二)麻醉用器械の準備



第百五十八圖　麻醉用假面の圖

第百五十九圖　麻醉用滴瓶の圖

手術臺の近傍に左の器械を備へ置くべし。目盛附着色「クロ、ホルム」滴罎、(目盛附「エーテル」滴罎)、「クロ、ホルム」假面(「エーテル」假面)及び假面用布、(「エーテル」を使用する時には布片の外に「エーテル」の撥散を防ぐ爲に油紙又は護謨布を要す)、ハイステル氏開口器、筷口器、舌鉗子、口腔咽頭清拭用挾綿子(或はシーベル)、膿盆及カンフル油注射器等。

(三)麻醉の經過及び介助

諸姉は麻醉中「クロ、ホルム」(又は「エーテル」)の滴下狀態及呼吸、脈搏、瞳孔、

第百六十圖　麻醉用の開口器の圖

第百六十一圖　鉗口器の圖

第百六十二圖　舌鉗子の圖

徑の距離に保持し、患者既に數滴を吸引せる後始て顔面上に置其中央部に藥液を點滴狀に滴下す決して注下すべからず、一分間に落下する滴數は患者によりて異る。麻醉の初めに於て高聲に且長く一二三……と數を叫ばしむれば宜し。常に同一の場所に藥液を滴下する時は往々顔面皮膚上に滴り之れを腐蝕するに至る。

顔色の監視をなすに專心し、快して手術等を傍見すべからず。且つ迷朦間の各事變を直に術者に通告すべし、これ些細なる不注意より死を招くことあればなり。

麻醉開始に當り室内靜なるを要す。

假面を口唇前約一指横

麻醉の始めより醒覺に至るまでを四期に分つ、(一)意識期、(二)興奮期、(三)迷朦期、(四)醒覺期是れなり、即通常迷朦に入る前、多少著明なる興奮狀態を呈し、高聲に種々の言語を發し、號泣し又は高唱し或は高笑をなす外種々なる運動及び跳躍をなす事あり。既に迷朦期に入れば、四肢の筋肉弛緩し、少しく扛擧すれば抵抗なく落下し、多くの反射作用消失す、而して

(イ)呼吸　最初淺表にして促迫することあるも、迷朦の進むに從ひて平靜となる

(ロ)脈搏　興奮期には多少頻數となるも迷朦期に入れば緩徐となる

(ハ)瞳孔　は迷朦するに從ひて縮少し光線反應漸次鈍となり角膜を觸るるも瞳孔は反應せざるに至る。

縮少せる瞳孔俄然散大するは醒覺或は瀕死の孰れかにして、後者にありては脈搏及び呼吸共に險惡且つ四肢厥冷、顔面蒼白となる。

此中迷朦期は最も手術に適したる時期なれば麻醉者は常に此狀態を永續するに努むべし、若し誤りて過度に迷朦せしむれば惹いて死の轉機を

第百六十三圖

角膜反應を檢する圖

取り、滴下を怠れば醒覺して再び四肢の緊張を始むべし。此の時期には次に述ぶるが如く呼吸障害を起しやすきものなれば豫め口を開き嚥口器を貼すべし。

(四)麻醉中に起る障碍

(イ)呼吸障碍　麻醉の初期に呼吸中絶することあり、此の時には假面を去り呼吸の回復を圖るべし。

迷朦時に舌筋弛緩し舌喉頭内に落下し氣道を塞ぎ呼吸障碍乃至呼吸中絶を來すときは左右の下顎隅を手指にて掴み、下門齒を上門齒の前方に來らしめ、此位置にて下顎を保持すべし。尚奏効せざれば開口器を以て口を開き、舌鉗子にて舌を引き出し、再び口の閉ぢざる樣嚥口器を挿入して人工呼吸法を施す。

第百六十四圖

嘔吐時處置の圖

凡て呼吸障碍の有無は患者の顏色によりて知るを得るものなり、常に顏色に注意し、チャノーゼを呈する時は呼吸障碍の存するものと知るべし。

心臟機能衰えたる時は顏色蒼白となるものなれば顏色を注視せば此等の危險を豫知するを得るものなり。

(ロ)嘔吐　麻醉の各時期に來る障碍にして、嘔吐時には頭を下げ顏を横に向け、吐物の氣道内に迷入する事なからしむべし、嘔吐終れば口腔、咽頭を拭ふべし。

(ハ)脈搏不正、瞳孔散大、光線反射反應消失、假死等の危險あり。

かゝる場合には假面を去り術者の指揮に從ひ人工呼吸法を行ふ。

尚上膊後面を手術臺緣に壓迫し、或は頭を超えて手を高く擧上せしむれば麻醉後上肢に神經麻痺を來すことあり

第二項　腰髓麻醉

腰髓麻醉は第二―第五腰椎棘狀突起の間に長大なる針を凡そ四―七仙米刺入して滴下せる脊髓液に「トロバコカイン」「ストヴァイン」等の如き麻醉藥を溶解して再び脊椎管内に注入するの法なり。此によりて下半身の知覺麻痺を招來せしむるを得。

注射時患者の體位　坐位若くは横臥位をとり脊梁を後方に彎曲せしむべし。

注射部の消毒　豫め「エーテル」を以て清拭せる後廣く沃度丁幾を塗布すれば可なり。而して穴明敷布を以て注射部位のみを露出し末消毒部を被包するを良とす。

注射用器具及藥品

七糎の長さを有し中等大の針を附したる五―一〇c.c.入の單純なる注射器、滅菌シャーレ（平皿）二個（内一は滴下する脊髄液を受くるに使用他の一は滅菌食鹽水を盛るに用ふ）、トロバコカイン（〇・〇五―〇・〇七）、滅菌生理的食鹽水、沃度コロヂウム、胖創膏、

注射後の體位　注射後仰臥位となす、而して開腹手術を施さんとする時は注射後骨盤高位（其傾斜角約二〇―三〇度）となし、麻痺の高さ臍高に達するを待ちて水平に復す、其持續時間凡そ二三分なり。

局所麻醉の圖

第三項　局所麻醉

局所麻醉に二あり、浸潤麻醉及傳達麻醉是なり。

浸潤麻醉

浸潤麻醉　はシュライヒ氏液を皮膚に注射し局所に浸潤せしめ麻痺せしむるの法なり。シュライヒ氏浸潤麻醉液は〇・二％食鹽水中に少量の「コカイン」及び「モルヒネ」を溶解したる者なり、「コカイン」の多寡に由りて第一、第二、第三液を區別す。「モルフィン」の代りは「アリピン」用ひらる。

「コカイン」は毒性強きを以て近來生理的食鹽水に「ノボカイン」を〇・五―二・〇％の割合に溶解し、此れに少量の「アドレナリン」を注加したる者を用ふ。

傳達麻醉

傳達麻醉　は知覺神經及び其の周圍に藥液を注射し、其の神經幹を麻痺せしめ（浸潤麻醉にては神經末梢を麻痺せしむ）、神經分布區域内の知覺を消失せしむる方法なり。

藥品として通常〇・五―二・〇％ノボカイン液を使用す。

注射藥液を作るには

先づ右記の溶液を作り唯一回煮沸し直に冷却すべし、

次で用に臨み以上の液一〇―一五ccに一滴の一％アドレナリンを加ふ。

手術中の介助

第四節　手術中の介助

手術中に於ける諸姉の任務は、醫師をして他に顧慮する所なく安心して專心手術に從事するを得せしむるにあり。從ひて周到なる注意と鋭敏なる觀察を以て手術室内の整理、消毒、異常を監視する外、手術の進行に連れ所要の器具を前以て整へ手術經過に澁滯を來さしむべからず、又醫師の少き時は助手となりて醫師の命に從ひて柔順に而も機敏に介助すべし。諸姉の介助方法宜しきを得ると否とは手術の成績に大關係を有するは勿論、其爲に手術を困難ならしむ。而して此によりて諸姉の技能を明らかに卜するを得、諸姉力めざるべからず。

患者が悉く婦人なると、疾患部位が主に恥部なることによりて、羞恥の感甚だしきものなれば、細心なる注意と温情とを以て之れに接するを要す、決して患者に不快の念を起さしむるが如き行あるべからず。

婦人科疾患の主なる徴候

第一節　婦人科疾患の主なる徴候

帶下

帶下　陰部より漏出する分泌物にして粘液様、粘液膿様若しくは純膿様なるもの、又は肉汁様のものあり、又往々悪臭を發す。

各種の婦人科的疾患に伴ふものにして、淋毒性疾患にありては膿様分泌物多く、悪臭を有する肉汁様帶下は癌腫に特有なり。此の外全身性疾患又は體質異常によりて帶下を訴ふる者少なからず。

帶下多ければ陰部は爲に濕潤し糜爛す、故に常に外陰部を清淨にし、軟膏の塗布、デルマトール等の撒布を行ひ、醫師に報じて其處置を乞ふべし。

出血

出血　出血か月經間歇時に單獨に來ることあり、又月經過多症として來ることあり。出血量は種々にして少量なるもの又大量にして凝血を混じ、爲に急性貧血を招くものあり。

且出血が何等の原因なくして來るもの或は交接、排便等の如き直接又は間接の刺戟によりて來るものあり。

其原因は種々なるも子宮癌、子宮筋腫、子宮内膜炎、更年期出血、悪性脈絡膜腫は其主なるものなり。故に不規則の出血あれば救急處置として先づ止血腟塡塞を行ひ、患者に安靜を命じ、且必ず醫師の治療を受けしめざるべからず。

疼痛

疼痛　月經困難症として月經時に非常の疼痛を訴ふるもの、又月經と月經との中間に疼痛のあるもの、或は全く此れと無關係なるものあり。

凡て婦人科的疾患による疼痛は主として下腹部、腰部及び薦骨部に限局せるも、牽引性疼痛は屢〻上腿に波及す、又反對に上腹部、肩胛まで放散するものあり。

婦人科的疾患にして疼痛を起すは主として喇叭管、卵巣の炎症にして、子宮癌は末期に至らざれば疼痛を發することなし。

凡て疼痛を有するものには安靜を守らしめ、便通を整へ、腰部の保温及腹部の罨法を施す(冷熱何れを用ふるかは患者の自覺症狀に由る)、而して醫治を求めしむ。

腫物

腫物　婦人科的疾患は腫物を形成すること甚だ頻數なり。患者自ら之れに觸れ發見すること少なからず。

最も巨大なる腫瘍を形成するは卵巣囊腫にして通常波動あり。子宮出血を伴へる中等大の

硬固なる腫瘍は子宮筋腫にして、喇叭管及卵巣の炎症性腫瘍には壓痛あり、其の形不規則にして周圍との境界左程明らかならず。高熱を伴ひて速かに増大し非動性の不規則なる腫瘍は主として炎症性滲出物なり。子宮癌腫は主として子宮膣部及び頸部に發生するを以て腹壁より觸知し得るが如き腫瘍を形成すること少し、されども内診を行へば子宮膣部又は頸部増大し、出血し易く組織脆弱なるによりて容易に診斷せらる。

外陰部の腫瘍は、バルトリン氏腺の腫脹、子宮及び膣脱出に由るもの多し。かゝるものは濕潤せる殺菌綿紗にて之を被ひ、汚染と乾燥とを防ぎ速かに醫師の處置を乞はしむべし。

熱發　炎症性疾患は熱を伴ふも、癌、筋腫、嚢腫等の腫瘍には之れを見ること少し。

其他　食思不振、惡心、嘔吐、便秘、睡眠不安、頭痛、腰薦痛、四肢の冷感等を訴ふ。

以上は婦人科疾患に現はるゝ極めて主要なる徴候なり、故にかゝる訴へを有する婦人には速かに醫治を求めしむべし。

第二節　婦人科診察準備

一般の注意　醫師の診察に便なる樣準備せざるべからず。先づ診察に要する器具を整頓し、診察上參考となるべき患者の排泄物或は分泌物、例令ば尿、糞便、喀痰、吐物等を豫め保存し置くべし。醫師の診察中診察室及其附近は極めて靜なるを要するを以て、種々なる物音話聲等診察の妨げとなるものを禁じ、窓戸を閉ずべし。

薄暗き室は診察殊に望診に不便なり、故に室内の採光に注意し充分明るくなし置くべし、尤も日光の直射を避けざるべからず。又室内を温暖に保ち、患者をして寒冷を感ぜしめざる樣にすべし。患者若し故なくして診察を厭ひ、或は最初の診察に苦痛を感じたるが爲爾後の診察時に於て恐怖の念を抱くときは之を慰め、快く且つ靜に診察を受くる樣になすべし。患者若し診察前に於て何等かの原因によりて甚だしく興奮せるときは豫め此の事を醫師に報告すべし。

前以て患者の衣帶を解き何時にても受診局所を露出するを得る樣準備なし置くべし。

診察前必ずしも排尿せしむるの必要なし、殊に泌尿器疾患を有するものにありては、檢尿の必要あれば醫師の命を待ちて排尿せしむべきなり。

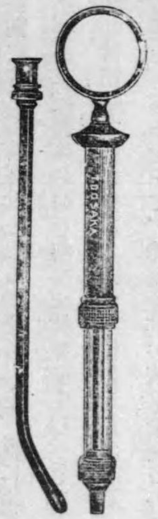
醫師の診察時之れに便なるが如き位置を患者に取らしめざるべからず、然れども患者は元來苦惱を有するを以て、診察中其の苦痛を増さゞる樣患者を支持するを要す。

腹部檢診時は腹壁の弛緩を計らざるべからず、即ち下肢を曲げ、可成上半身を少しく高くし頭を枕の上に安置せしむべし、尚腹壁の緊張する者には口を開きて深呼吸を營ましむる

か、或は患婦に話かけて患婦の注意力を他方に向けて怒責するを得ざらしむべし。

器械類の準備　聽診器打診機打診板、舌壓子、檢温器、反射鏡、卷尺、骨盤計、圖型ゴム印版爪切剪刀、爪鑢、石鹸、刷毛、手洗鉢、イルリガートル、子宮鏡、子宮消息子、消息子、捲綿子、ミュゾー氏鉗子、單鈎鉗子、長鑷子、剪刀、尖刄刀、試驗的搔爬用キュレット、大麥粒鉗子（消毒機械を取扱ふに使用す）、ボーズマン氏カテーテル、ゴム製手袋、指袋、膀胱鏡及附屬品、導尿カテーテル、メートルグラス。

第百六十五圖



ブラウン氏子宮注射器の圖

綿球、綿紗、タンポン、捲綿子用綿或は眞田紐、丁字帶

「リゾール」、「デシンフエクトール」、酒精、「エーテル」、殺菌オレーフ油又は「ワゼリン」。

婦人科診察法　（産科診察法に同じ）

第三節　腟洗滌

腟洗滌は種々の目的にて行はる、必ず醫師の命によりて行ふべし。

準備　灌水器を導水管嘴管と共に千倍昇汞水等にてよく消毒したる後、洗滌液を其の中に注入すべし。其温度は通常體温位なるべし、特別の場合に冷水或は熱水（攝氏五十度位迄）を用ふることあり。液の使用量も亦目的によりて異る。イルリガートルの高さは患者の位置よりも一―一・五メートル高くす、此れより高ければ水壓過强なる爲害あり。

其法　患者を診察臺に乘せ截石位を採らしむべし。最初先づ外陰部を洗滌す、此際嘴管末端を陰阜の前上方持ち來し、藥液を外陰部の前方より後方に向ひて放流せしむべし。次に豫め消毒したる他手の指を導子として嘴管を腟内に挿入し藥液を注下しつゝ、挿入せる指を用てよく腟壁を洗滌すべし、此際陰核又は尿道隆起に手指を觸れざる樣にし、腟壁の損傷殊に處女膜に注意して破損せざるべし。洗滌終了せば腟の後壁を少しく壓し、腟内に殘れる洗滌液を悉く流出せしむ、其後外陰部及會陰を清淨に乾拭すべし。

第四節　子宮鏡使用法

凡て子宮鏡は使用前之を煮沸消毒し、體温と同温位の一%リゾール液内に浸し置くべし。かくの如くリゾール液を以て濕せば表面滑脫となり殺菌オレーフ油等を塗布する要なし。

一、ジモン氏子宮鏡使用法　豫め手指を消毒し置き、左手の二指にて陰唇（常に前以て外陰

部を洗滌するを要す）を開き、右手にて子宮鏡の後葉の柄を把持し其嘴端を多少斜になして靜かに腟内に挿入し、深く入るに及んで柄を垂直にし會陰を輕壓し、次で前葉の柄を上に向けて徐〻に挿入し、上下に柄を引きて腟壁を開く、此の際牽引を加減して兩葉の間に子宮腟部及子宮口を露出す。使用後先づ前壁のものを除き、次で後葉を去る。

二、クスコー氏二瓣狀子宮鏡使用法　前同樣に左手の二指にて陰唇を開き、子宮鏡の嘴端を閉ぢたるまゝ少しく斜にして腟の後壁に沿ひて之れを進め、やゝ捻轉して把柄部が上方に向くまで起し、子宮口に達したる頃把柄を以て嘴を開くべし、かくて子宮腟部及子宮口は兩嘴端の間に現はる。

子宮鏡を引き出すには、徐々に閉ぢつゝ半開のまゝにて拔き去るべし。全く閉ずる時は二瓣間に腟粘膜を挾むことあり、注意すべし。

三、圓筒狀子宮鏡使用法　陰唇を前述の如く開き、細き端の尖れる方を腟の後壁に當て、靜かに送入す、此の際陰唇及陰毛を共に押し入れざる樣注意すべし。送入時緩やかに旋回しつつ深部に進ましめ尖端後腟穹窿部に達するに至りて止む。之を除去するには前同樣に旋回しつゝ徐々に拔き去る。

第五節　腟塡塞法

腟塡塞（タンポン）とは殺菌綿球を以て腟腔を充塡するの法にして、腟、子宮及其他に藥液を作用せしむる爲、又は子宮腟よりの出血を止むる等の目的を有す。

一、藥用タンポン　綿花を球狀となし、糸にて其中央を縛り、之れに藥液又は藥粉を附して用ふ。

先づ腟内を洗滌し子宮鏡を用ひて腟壁を開き長鑷子を以て綿球を挾み之に藥品を濕し腟内に挿入し子宮口邊乃至後腟穹窿部に至らしめ、之を鑷子にて抑へたるまゝ子宮鏡を去り次で鑷子を除く。「タンポン」を腟入口の邊に置く時は患婦に不快の感を起さしむるものなれば可成深部に挿入し置くべし。綿花タンポンは一定時間の後に拔き去るべし、其時間は醫師の命に從ひ且除去後直ちに腟洗滌を行ふを可とす。

二、壓迫タンポン　主として子宮出血を鎭止し且陣痛を喚起するの目的を以て腟内に異物を送入する法にして、栓塞子として通常綿球、制腐綿紗を用ふるも、陣痛催進の目的には「コルポイリンテル」を用ふ。

止血用には強靱なる糸にて中央を縛りたる綿球又は綿花を消毒藥に浸し固く絞りたるもの

を用ふるか或は制腐綿紗を使用するも、前者の方有効なり。されども後者は其操作簡簡なるを便とす。

「タンポン」を挿入するには術者の手指は勿論、患者の局部を消毒し、子宮鏡を用ひて腟壁を開き長鑷子を以て栓塞子を子宮後腟穹窿部及腟に堅く塡塞すべし。若し救急の場合にして子宮鏡を所持せざる時は左手の示指及び中指を腟内に挿入し腟穹窿に達せしめ、この指に沿ひて長鑷子を以て栓塞子を塡塞すべし。

止血用タンポンは一定時間其儘になし置くも十二時間以上に亘るべからず。

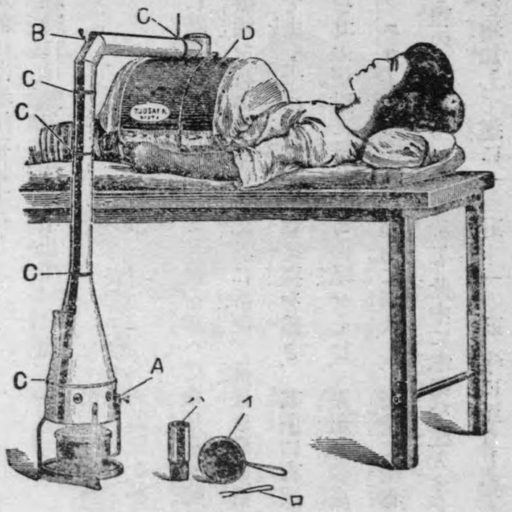
第六節　熱氣療法

本法は高熱乾燥空氣を局所に作用せしむるを以て目的とす。

裝置　通常高山式熱氣浴裝置を使用す。熱源として焜爐、アルコール、ランプ、又は瓦斯を使用す。近時保温匣内に電燈を裝置し又は電流を通じて空氣を熱せしむる法行はる。

準備　患者の衣類を解きて浴衣に代へしむるか、襦袢のみとなし(發汗し衣類を濕潤せしむる怖れあり)床上に仰臥せしめ、體温を測りたる後、可成腹部を露出し、之れを保温匣を以て被ひ、次に熱源及び熱氣誘導圓筒を裝置したる後熱源に點火すべし。

第百六十六圖



高山式熱氣療法の圖

使用時間及其他の注意

持續時間　最初は一五—二〇分間とし、次第に延長し三十分、一時間乃至一時間半まで達せしむることあり。

熱度　初めは六〇—七〇度となし、次回には八〇—九〇度に上昇せしめ次で一〇〇度に達し、終に一〇〇—一三〇(時として一四〇度)の高温度にて持續す。

熱氣浴中途に一度檢温し、且浴後更に檢温し、之を醫師に示さざるべからず、此れ熱氣浴により體温上昇するものは熱氣浴の禁忌なればなり。

又同時に脈搏、呼吸をも檢査し、非常に頻數なるもの或は呼吸促迫せるものは直ちに醫師に報告すべし。浴中常に保温匣に附したる檢温器(二〇〇度まで檢温しうるものを裝置す)に

よりて匣内の温度を檢し調節瓣の開閉によりて温度を調節せざるべからず。熱氣療法中患者睡眠し、其の間に保温匣内の温度下降冷却し、爲めに寒冒に犯されたるもの少なからず。熱氣浴終了後熱源を去り保温匣内の温度四〇—五〇度に下るを待ちて裝置を除き汗を拭ひ尚暫時身體を温暖に被包し安靜臥床せしむるを良とす。上氣し易き婦人にありては熱氣浴中頭部に冷罨法を施すべし。

月經時には熱氣療法を中止す。

第七節　壓迫療法

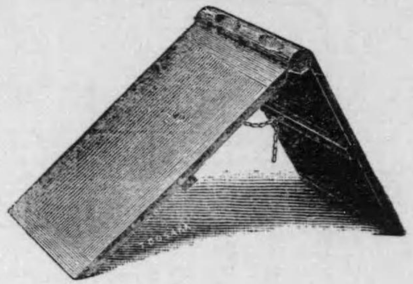
患部に荷重し、之に壓迫と伸展を加へて疾病を治療する法なり。

壓迫療法を行ふ前豫め患者に排便、排尿せしめ診察臺上にて熱水洗滌を施こし置くべし。而して床上に骨盤高位壓迫臺を置き、其上に布團を敷き、壓迫臺の長脚に臀部を乘せ、膝膕を其の頂點に接せしめ仰臥せしむ、壓迫臺の高さは凡そ三十糎位なれば良し。

次にクスコー氏子宮鏡を膣内に挿入し、完全に消毒したる「コルポイリンテル」（膀胱製水銀嚢）を膣内に入れ、漏斗により此中に水銀を注入す。其量初め五〇〇瓦位に止め、毎回五〇瓦を增加して遂に一瓩—一瓩半に至らしむるものなり。注入後、「コルポイリンテル」に附せる括栓を閉塞して水銀の流出を防ぐ、尚腹壓上には一—二瓩の霰彈嚢を載すべし。一側にのみ病變ある時には患側を下にして側臥位を取らしむ。

持續時間　最初二〇—三〇分位にし、次第に一—三時間に及ぶ。壓迫療法終了せば骨盤高位壓迫臺を低くし患婦を水平位となし、「コルポイリンテル」の括栓を開き水銀を流出せしむ、かくして大部分の水銀流出せる後「コルポイリンテル」を引き出す。其の後腹部の霰彈を除くべし。

第百六十七圖



壓迫臺の圖

然る後患婦を暫時安靜になし徐々に離床せしむ。

大正十五年十一月十日印刷
大正十五年十一月十七日發行

岡林產藝學下卷

正價金參圓八拾錢

著者　東京市本郷區湯島切通坂町八番地　岡林秀一

發行者　東京市本郷區湯島切通坂町五一番地　小立鉦四郎

印刷者　東京市本郷區湯島切通坂町五一番地　加藤晴吉

印刷所　東京市本郷區湯島切通坂町五一番地　合資會社　正文舍第一工場

著印檢者

發行所

東京市本郷區春木町三丁目
電話小石川三五一〇　振替東京一四九　南江堂書店

京都市上京區寺町通御池南
電話上三〇三〇　振替大阪二五〇五　南江堂京都支店

56
245

終